

カトリック六甲教会 教会報

2011

9

No.477

神の子の輝き

助任司祭 片柳 弘史

夏のあいだ、みなさんいかがお過ごしでしたか。きっと海水浴、花火、BBQ、夕涼み、高校野球など、夏ならではの楽しみを満喫されたことでしょう。

わたしにとってこの夏一番の思い出、神様から頂いた最大のプレゼントは、教会学校のキャンプのあいだに起こった一つの出来事でした。7年前から教会学校のリーダーとして大活躍しているU君が、迷いに迷った末、ついに洗礼を受ける決心をしたのです。

キャンプ最後の晩のことでした。子どもたちが寝静まり、リーダーたちが集まって話していたとき、一人のリーダーが「そろそろ洗礼を受ける決心をしたらどうだ」とU君に声をかけました。いつもなら「うーん、まあそのことはまた後で」と言ってはぐらかす彼から、そのときは何と「うん、そうだね」という答えが返ってきました。

翌日のミサの中で、U君の洗礼準備のために祈り、また彼自身から子どもたちに向けて洗礼を受ける決意をした経緯を話してもらいました。彼が話してくれたのは、次のようなことでした。「昨日の晩、キャンプ・ファイヤーに全力で取り組んでいるリーダーや子どもたちの姿を見ているうちに、ふと自分にも昔あんなふうに輝いていたときがあったことを思い出しました。洗礼を受けることで神様の子どもとして生まれ変わり、あの輝きをもう一度とり戻したい、心からそう願っています。」

学校を卒業した後、さまざまな困難と闘いながら生きている彼がそう語るのを聞いて、わたしを含め彼のことをよく知っている仲間たちは思わず涙をこぼしそうになりました。全てに命を与える聖霊の光が、教会学校のリーダーや子どもたちを通して燦然と輝き、困難の中で苦しんでいた一つの尊い魂を救ったのです。

現在の日本社会には、彼のように「もう一度輝きたい」という願いを心の奥底に秘めながら、光を探し求めて苦しんでいる人たちがたくさんいるだろうと思います。もし教会に集ったわたし



たちが神の愛に固く結ばれ、喜びと平和のうちにまばゆい光を放っているならば、きっとその人たちは教会に救いを見いだすに違いありません。

福音宣教は、人間の言葉や力によってではなく、わたしたちを通して発せられる聖霊の輝きによって完成される。この出来事を通して、とても大切なことを学ばせてもらいました。どうぞ皆さん、U君のために祈ってあげてください。

<行事報告>

バーベキュー大会(7月24日)

2011年度、婦人会のご協力を得て、壮年会主催のバーベキュー大会を実施しました。壮年会には呑み助が多いのか？こういった親睦会は需要が大きく、実施の運びとなりました。

当日は天候にも恵まれ、絶好のバーベキュー日和になりました。気温上昇に伴い、吸い寄せられる様に人が増え、開始1時間後には、肉、ウインナー、そうめんが完売になってしまいました。藤棚の下だけではなく、予備テント・信徒会館ロビーにまで人があふれていました。しかし、風はどこからふいてくるのか、やはり、藤棚の下は心地よいですね。思い思いに食し、語り合い、親睦を深められたと思います。

また、バーベキュー完売の頃、前日に結婚式を挙げた保坂(中村)夫妻が挨拶に来られ、更に盛り上がりました。片柳神父様が提供されたワイン6本は瞬く間に無くなりました。そうそう、ワインは最初よりも、後に提供された方がおいしかった！「カナの婚礼」が成就しましたね！

最後に、スイカ・そうめんを用意いただいた婦人会の皆様、ありがとうございました。また、計画・段取り・前日／当日準備・後片付け頂いた関係者の皆様おつかれ様せきた。(佐伯)



<行事報告>

2011年度平和旬間合同礼拝に参加して



8月7日(日)13時より、平和旬間における近隣教会とのエキュメニカル合同礼拝が行われた。まず始めに、実に素晴らしい合同礼拝であったことをお伝えしたい。

前奏で厳かに始まりが告げられ、神港教会 岩崎謙牧師による説教「わたしの中には平和がある」は、聖書朗読箇所(ヨハネ16章25~33節)の解き明かしがなされ、「平和」という言葉を「シャローム」という概念に広げて話された。朗読の最後の箇所(ヨハネ16・33)は、原語訳すると「あなた方はわたしの中で平和を持ちなさい、わたしの中にあるシャロームを持ちなさい。」であると言われ、見事にタイトルに帰結し、「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」(ヨハネ16・33)と、私達と東北・関東大震災での地震、津波、原発事故の被災者のためにも熱く語られた。岩崎牧師の言葉は聞くものの心を揺さぶり、乾いた砂に水



が浸み込んでいくようで、時間と共に背筋が伸びていくのを感じた。その後、六甲と神港教会の有志による合唱が高らかに歌い上げられ、平和と一致を願う力強いハーモニーの歌声が聖堂一杯に響き渡った。



最後の祝祷が松村信也主任司祭によって祈られ、シャロームの縦糸を継いだ見事なりレーのアンカーフィニッシュであった。共感を覚え、気が付けば「アーメン」と私の口から出ていた。(T. M)

教会学校キャンプ報告&感想文

今年も教会学校ではキャンプを行いました。8月7日(日)～9日(火)の日程で、場所はここ数年利用している兵庫県のハチ北に近い兎和野高原野外教育センターでした。

毎年、キャンプには「テーマ」があります。今年のことを考えてみて、やはり最初に頭に浮かんできたのは大地震のことでした。今でも苦しんでいる人がいる中、私達はただ単純に自分達のキャンプを楽しむのではなくて、楽しむ中にも何か心に残って、そして今後私達がしんどい思いをしている人のために働くことが出来るパワーを得られるような、そんな時間の過ごし方が出来ればと思い、テーマを「ピースフル」にしました。

そして、「ピース」とカタカナで書いた文字を英語に直す時に、「piece」(かけら)と「peace」(平和)という二つの言葉をイメージしました。私達一人ひとりには出来ることは限られています。でも、その一人ひとりが集まることで、大きなことが出来るかもしれません。そして、最終的には平和を創り出すことも出来ると思います。また、一人ひとりが幸せで、心の中が平和になれば、それを集めることで平和がいっぱいになります。今回のキャンプでは、そういった平和を五感によって感じたり、表現するということを大事にしました。

さて、キャンプの中身については、水鉄砲で遊んだり、夜はきれいな星空をみんなでゴロンと横になって眺めたりといった楽しいことから、自然の中で五感を使って平和を感じてみたり、替え歌で小さな劇を交えて平和を表現し、それをキャンプファイヤーで班ごとに発表する等、全体としてとてもピースフルなキャンプでした。(キャンプスタッフリーダー吉村)

1年生 わかな

キャンプでいちばんところにのこったことは、もりへは行ってかいちゅうでんとうをつけてほしをみにいったことです。そのもりにも、ほしはありましたが、しゅうてんのほうがいっぱいありました。みんな、しゅうてんについたら、しばふのうえにねころんでちょっとほしをみしました。ほしはかぞえきれないほどたくさんあってキラキラかがやいてとってもきれいでした。それからえとうリーダーがほしのしゅるいをおしえてくれました。

リーダーありがとう。

3年生 櫻子

8月7日～8月9日まで、うわの高原へきやんぷに行きました。小学生が60人で、全員で100人でした。天気は三日間とてもあつく、雨にあいませんでした。

キャンプでは、水でっぼうやキャンプファイヤー、オリエンテーションや思い出づくりがありました。私が一番楽しかったのは、ナイトウォークです。これは、えいごで「夜に歩く」という意味です。きゅうりリーダーがおどかしてきて、こわかったけれど、なんか楽しかったです。ナイトウォークの後に星のかんさつもしました。星のかんさつで、夏の大三角形をみしました。

二日目の朝に、虫とりをしに、5時におきました。そんなに早おきをしたのははじめてです。せっかく早おきをしたのに、「せみのぬけがら」2こしかとれなくてざんねでした。

私は7班でした。12人でリーダーが5人、こどもが、7人でした。7班は全員虫が大すきなのに、大さわリーダーは虫が大きらいでした。虫をくっつけたりしていたずらするのがおもしろかったです。大さわリーダーはやさしいリーダーでかた車やおんぶをしてくれ、たくさんあそんでもらいました。たのしかったです。

来年は、あついでから毎日水でっぼうときもだめしがあつたらいいな・・・あと、もう一日長い三

泊四日でいきたいな。

3年生 のぞむ

教会学校のみんなでキャンプに行ってきました。

一番楽しかったのはキャンプファイヤーでげきをやったことです。なぜかというともみんなにわらってもらえたからです。

今年のキャンプは2はく3日でした。そのわけは今年のしんさいひさい者のために1ぱくへらすということです。ぼくはさんせいでしたが、来年は1ぱくふやしてください。

5年生 近藤 佑樹

キャンプ当日になって、忘れ物をしていないか、少し不安になりました。でも、泊まるのは行きなれた兔和野高原です。今年は日数も一泊少なく、残念でした。

キャンプ場について班分けしたとき、自分が班長だったので、「自分、班長？」と思いました。「ならんで」とか、「意見だして」とか言うともみんながすぐ動いてくれて、ぼくはすごく助かりました。

きもだめしがなかったのは、残念でしたが、みんな楽しめたキャンプになったと思います。来年もまたもっと楽しめるキャンプにしたいです。

6年生 根於

これでさいごのキャンプです。ぼくは六年の間、かかさずキャンプに行きました。楽しかったこのキャンプは子どもとしてはさいごのキャンプです。大人になったら逆にキャンプをたのしませることができたらいいなと思います。

1日目は水でっぼうをして遊びました。水でっぼうはびしょびしょになったけど気持ちよかったです。

2日目はキャンプファイヤーをしました。そしてリーダーといっしょにげきなどをしました。この子どもとしてのさいごのキャンプはいろいろなことがあったけれども、自分としてはサイコーのキャンプでした。





<行事報告>

受洗の喜び



被昇天の祝日（8月15日）にマリア様のお恵みのもと洗礼を授けていただくことができました。六甲教会の信徒の皆様方に温かい拍手で迎えていただいたとき、こんなにも沢山の祈りと祝福を頂いた

ことを嬉しく思いました。

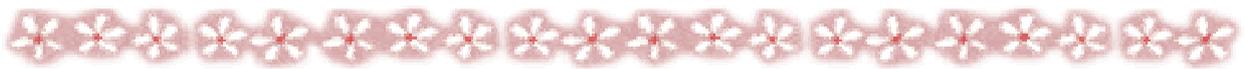
この子の誕生と入れ替わるようにして昨年夏に帰天した祖父の洗礼名を頂きました。教会と祈ることが大好きだった祖父のように、神様と教会の大好きな子どもに育ててほしいと思います。今後も六甲教会の皆様方とともに神様の愛を伝える使命を果たせますよう温かく見守り励ましてやっていただければ幸いです。どうぞよろしくお願い致します。（レオナルド 優 Family）



この度、松村神父様、Sr. 古屋敷のご指導と聖書を読む会のメンバー皆様のお力添えを得て、念願の洗礼を生後三ヶ月の可愛い赤ちゃんと一緒に授けて頂くことができました。

受洗前は喜びもあり、また、不安・心配もありの複雑な心境でしたが、受洗後多くの方からの祝福を頂き、その祝福して下さった全ての皆様ご自身が喜びに溢れているのを感じ、又祝福としてその喜びが私に分け与えられたような気がして、つまらない不安・心配は消えてしまいました。

いつか私も人に分け与えて上げられるほどの喜びに満たされる日が来ることを念願しています。神に感謝。（ヨセフ 柿原）



<行事報告>

東北ボランティア報告

今回、8月15日～19日の日程で教会代表として高校生4人、引率リーダー2人の計6人で東北へボランティアとして行きました。行き先は塩釜教会で、活動内容は公園の清掃活動（ヘドロかきや雑草抜き）、舟で島へ移動して島内の道路整備や海岸清掃でした。



現地では、人と人のつながりの強さを感じることに、そのつながりの中に自分達も小さい力ながら加わることが出来た喜びがありました。人のつながりはかけがえのないものです。このボランティアから帰ってきた私達がまた次に何かアクションを起こしていかなければと考えています。（吉村）

（高校生の感想）

藤本（高2）

まず感じたことは、自然の驚異というものだ。人間が自然を支配するというのが都市化だと考

えられているけれど、今回被災地を見て、人間が汗水垂らして造った建造物も自然を制御するために造られた堤防も自然から生まれた津波の前には全く歯が立たないということを実感した。だが、それでも自然をおそれて何もしないのではなく、自然と上手く共生していく為に策を練って努力すること、それこそ都市化された世界に住む人間の生きていく上でのテーマなのだと実感した。

そしてもう一つ感じたことが、人同士のつながりの大切さだ。自然の前に誰か1人では対抗することはできない。しかし、みんなが協力することで津波にのまれてボロボロだった塩釜も、あそこまで復興することができて、みんなが少しずつ元の生活に戻りつつある。今回の東北では、同じ塩釜ベースの人と一緒にいたから、塩釜の中の島公園や桂島の砂浜をきれいにできた。あれは六甲教会の人だけでは絶対にできない。他のボランティアの人や、アイスをくれた現地の人達の支えがあったからこそできた。だからこれからも色々な人とコミュニケーションを深めて、東北の人やボランティアで出会った人とつながりを持ち続け、みんなで協力することこそ、子供たちの笑顔にあふれた東北に戻す唯一の方法だと思う。まさに～ONE FOR ALL、ALL FOR ONE～だ。



<行事報告>

「被爆ピアノ」コンサートを聴いて

8月21日(日)午後2時から当教会主聖堂で「被爆ピアノ」コンサートが開催された。雨にもかかわらず、他教会からも大勢来られ、会場の主聖堂は250人余りの聴衆で埋まった。

この企画は最初、養成部が今年の「平和旬間」の行事として立案したもので、神戸地区宣教司牧評議会に持ちかけたところ、5月の神戸地区評議会で「神戸地区の平和旬間行事」として承認された。



今回運ばれた被爆ピアノは、広島市内の爆心地に近い民家にあったもので、爆風で飛ばされたピアノを調律師の矢川さん(両親も被爆され、奇跡的に助かった)が修復された1台。



それを当教会の信徒で、音楽家の林典子さんが演奏された。彼女の弾くバッハやモーツァルト、リストの曲が、蘇ったピアノの鍵盤に乗って、時には力強く、時には鎮魂を込めて聖堂内に響き渡ると、会場の聴衆は心を打たれたように静かに、味わうように聴き入っていた。私も66年前広島、長崎に原爆が投下された日のことを想い、多くの犠牲者に対して哀悼の気持ちを抱きながら、しばしピアノの旋律に耳を傾けていた。また二人の子供たちが林さんと連弾を披露してくれたが、ひたむきに弾く子供たちの姿を見ていると、本当に平和であることのありがたさを感じずにはいられなかった。



調律師の矢川さんは、原子兵器の廃絶を願い、戦後60年経った年から「被爆ピアノコンサート」を日本全国37か所で600回にのぼる演奏会を催したり、昨年9月11日にはニューヨークでもコンサートを開催した話を披露された。

我々もこのコンサートを通じて、あらためて「平和を願う」気持ちと「原子兵器の恐ろしさ」を痛感した。最後にピアノ伴奏に合わせて、会場の皆さんが「アーメンハレルヤ」を歌い、コンサートは成功裡に終了したが、もう少し多くの方が聴きにきていただき、「命の大切さを奏でる

平和の音色」を共感出来れば更によかったのではないだろうかと思った。

(蛭田)



納涼の夕べ

手をつなぎ 心つないで 夏祭り いらっしやい!



松村主任司祭の開会宣言で「納涼の夕べ」がスタート!

8月20日(土) 18:00~20:00
大人も子供もみんな一緒に楽しみました!



私達親子はスイカの販売を担当しています。



お馴染みの焼き鳥、焼きそばのコーナーは大人気。



子供たちは輪投げやヨウヨウ釣りに興じていました。



僕も手伝ってるよ。



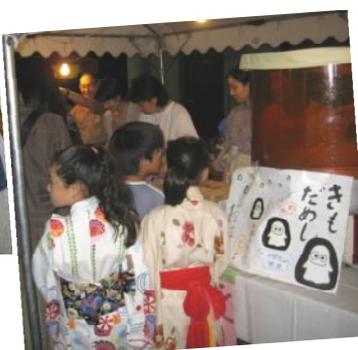
オマリー神父、高山神父様も来られました。



子供たちは「肝試し」にチャレンジだよ。



今日はお疲れ様!



《 各部だより 》

📖 地区会

9月18日(日)11:30 第5回地区役員会
13:30 地区役員分かち合い

📖 三日月会

9月4日(日)10時ミサ後 喫茶
9月19日(月) 三日月会総会

📖 教会学校

9月10日(土) 始業式

📖 宣教部

9月24日(土)10:00 宣教会

📖 典礼部

9月3日(土)10:00~16:00 侍者会
9月17日(土)10:00 典礼部会(第4会議室)

📖 社会活動部

9月2日(金) 初金ミサ後 社会活動部連絡会
※ 次回連絡会は11月4日(金)10時ミサ後開催予定です。

📖 施設管理部

9月25日(日)10時ミサ後 施設管理部会

📖 広報部

10月1日(土)10:00 教会報印刷

《 お知らせ 》

教会のみなさまに知って頂きたい活動やお知らせです

★ 養成部より ★

旧約聖書公開講座

日 時：2011年9月24日・25日 両日共に13時より
場 所：カトリック六甲教会大聖堂
講 師：雨宮 慧神父
テーマ：モーセという人

★ 社会活動部より ★

9月 2日(金)初金ミサ後 ♪社会活動部連絡会(第2会議室)

※ 社会活動部連絡会は、チャリティーバザーの打ち合わせをいたします。

出店ご希望グループの方は、必ずご出席(代理出席OK!)下さい。

7日(水)10:00 ♪手芸の集い(第1・2会議室) どなたでも参加ご自由です。

10日(土)10:00 ♪炊き出し(イグナチオホールお台所)

小野浜グラウンドにて配食や、おじさん達のお話し相手だけでもOKです。

12日(月)9:30 ♪ともしび(お台所) ケーキづくり

15日(木)14:00 ♪ベタニアの集い(イグナチオホール) 聖体拝領式&茶話会

18日(日)ミサ後 ♪ミニバザー お弁当・手芸品等の販売

30日(金)9:30 ♪ともしび(お台所) ケーキづくり

★ 図書室より ★ —新着図書・古本市・貸し出しと返却—

1、新着図書

「マタイによる福音書」「マルコによる福音書」「ルカによる福音書」イーピックス出版

Mattai ga Tayori Makko a Tayori Rukka a Tayori 山浦玄嗣 訳

ケセン語訳聖書4冊の内3冊。大船渡市に住むカトリック信者の内科医の山浦玄嗣先生が、ギリシャ語の勉強から始められて、福音書を東北方言のケセン(気仙)語に訳したものです。

六甲教会図書室には、以前から「ヨハネによる福音書」のみありました。このたびの大震災で出版社イーピックスは津波の被害を受け、社屋は流され、在庫の本もほとんど水を被ってしまいました。外装をはずして生かすことができるものを「お水くぐりの聖書＝津波の洗礼を受けた聖書」として販売を始めたものです。この機会に残りの3点を購入いたしました。

山浦先生の朗読CDを聞きながら、土着の言葉の響きの中で、味わってみてはいかがでしょうか。日本人には懐かしい肌触りのイエシュウの言葉が語りかけてきてくれると思います。なお、このケセン語聖書はローマ教皇にも献じられ、大きな評価を受けています。

「聖書」フランシスコ会聖書研究所 訳注

待たれていたフランシスコ会訳「聖書 原文校訂による口語訳」が、やっと新旧あわせて1冊の本になりました。1955年のフランシスコ会聖書研究所の翻訳事業の開始から2002年「エレミア書」刊行で、全巻の分冊が揃い、新約は1980年合冊版が出されていました。

新共同訳と比較しながら読んでみると、新しい発見・理解に至ることができるかもしれません。

「女性の神秘家・教会博士」 教皇ベネディクト16世 著 カトリック中央協議会出版局

西洋中世を生き「生活の聖性と豊かな教えにおいて際立った」15名の女性を考察する『女性の神秘家』と、近世から現代に至るまでの八名の教会博士を取り上げる『教会博士』の二編を収録。『使徒一教会の起源』『教父』『中世の神学者』の続編となる列伝体の教会史完結編。

2、チャリティーバザーでの古本市の中止

例年11月のチャリティーバザーにおいて、好評を頂いていた古本市ではありますが、図書室での処理能力を超えた図書の量が集まり、また多くの本が売れ残ることが予想されます。そこで、今年度からは古本市を中止したいと考えています。ご期待されていた皆様には、真に申し訳ありませんが、宜しくご理解のほどをお願い申し上げます。

また図書の寄贈先としては、他の機関による「古本市」をご利用いただけたらと思います。例えば、六甲教会近隣では、「神戸学生青年センター」が例年3月15日頃から2ヶ月間、古本市が開かれます。本の受付は3月1日～31日。売り上げは、留学生や移住労働者の支援のために使われています。

3、カトリック六甲教会図書室からの図書・CD等の貸し出しと返却について

信徒会館の改装と時期を同じくして、図書室の運営と利用の仕方を変更いたしました。図書・CD等の貸し出しについては、教会報3月号・5月号でお知らせしましたように、新しく図書利用者カードを作ってください。貸し出し時に教会事務室の貸し出しカードに必要事項を記入していただき借出してください。禁帯出のラベルの貼ってあるものは貸し出しいたしません。

返却時には、上記貸し出しノート該当欄に“済”と記入し、図書室入り口右の棚の、「返却所」においてください。他の利用者のため、早めのご返却をお願いいたします。詳細については、受付事務所前・図書室に掲示の「利用のしおり」を良くお読み下さい。



ご質問・ご意見・ご希望がありましたら、図書室の「ご意見箱」にお願い致します。図書室では、皆様のご利用をお待ちしております。

～地区会便り～

灘北 2

灘北2地区は、教会前の道路より東側、阪急電鉄の北側の灘区の、教会と援助修道会を含む区域です。信徒世帯数は100世帯、信徒数は198名で、その内70歳以上が70名です。一方子どもを含む若い世帯の家庭、若者たちも多く、心強い地域でもあります。

これまで2回の教会掃除、この度の納涼の夕べの担当のお手伝いにも大勢が集まって下さいました。老若男女が同じ担当の中で役目を分かち合う姿は、これこそ地区会と思えました。新しいメンバーのお名前やお顔を知り、家族単位で教会の行事や活動に参加することによって、信徒同士が気軽に声を掛け合い、交わりの中から温かいふれあいが始まっていくと信じています。共同体の中では、今もお年寄りのゴミ出し・買い物・通院の補助・お話し相手など、分かち合い支えて下さっております。独り住まいのお年寄りのご様子も少しずつ把握し、寄り添い支えあっていくこと、これから育っていく児童から青年たちへ心配りをし、見守っていくこと——それが地区会のつながりだと思います。

片柳神父様が「ロザリオの輪」と題して(教会報5月号)、地区のつながりを土台にして、信徒間の横のつながりを育てようと話されています。鎖が切れてバラバラにならないように、横につながり、同じ信仰に縦に結ばれ、十字架の強い絆で前に進んでいきたいと願っています。

なお、教会行事や活動の際には、阪神地区の方々と共に行動いたします。

(地区長 藤井・副地区長 飯塚・春野)

📖 図書紹介

「信仰のものがたり」 日野原重明・星野富弘・水野源三・佐藤初女 (日本キリスト教団出版部)

多くの本やメディアを通して「健康の達人」の秘訣を語りかける日野原さん。口にくわえた絵筆で描いた美しい花の絵で私たちに生きることへの喜びを伝える富弘さん。唯一の表現方法の「まばたき」で神様とのはなしをたくさんの詩や歌にして今もなお私たちの心を打ち続ける水野源三さん。「森のイスキア」のオニギリ作りで人々を迎え、奉仕の生きかたを示し続ける初女(カトリック信者)さん。そして「氷点」や「塩狩峠」などの小説を遺した三浦綾子さん。このすばらしいキリスト者たちのひたむきな生き方に触れ、人々の魂との出会いを促してくれる小冊子です。

この本は、プロテスタントの雑誌「信徒の友」の別冊(1000円+税)ですが、一般書店でも売られていて、カトリック教会にもこのようなほのぼのとした生きる力を湧きあがらせてくれる雑誌や企画が欲しいと、うらやましく感じさせられるような本です。

おわりに水野源三さんの詩をひとつ

「生きる」

神様の 大きな御手の中で
かたつむりは かたつむりらしく歩み
蛍草は 蛍草らしく咲き
雨蛙は 雨蛙らしく鳴き
神様の 大きな御手の中で
私は 私らしく 生きる



忘れられたスラム街

助任司祭 片柳 弘史



スモーキー・マウンテンという地名に聞き覚えのある方は多いだろう。フィリピンの首都、マニラの沿岸部にかつて存在した巨大なゴミの山で、その周辺にはゴミ拾いを生業とする人たちが数万人暮らすスラム街が存在した。1995年にゴミの山が政府によって閉鎖されたことでスラム街の存在も忘れられたが、今でもほぼ同じ場所にゴミ拾いをして生活する人々が5千人以上暮らすスラム街が存在する。今回、イエズス会の養成の一環として、

そのスラム街の家庭に2週間ホームステイする機会を与えられた。

(1) ゴミ捨て場の生活

そのスラム街は、かつてのゴミの山を間近に望む埋立地にある。今も昔と変わらず毎日、大量のゴミがトラックで運ばれてくるが、埋立地の端にある港から巨大な船に載せられて沖合の島へ運ばれるために山ができることはない。人々は、トラックから降ろされたゴミが船まで運ばれる間に、先を争うようにして資源ゴミを集めている。すさまじい悪臭と照りつける日差しの中での厳しい作業だが、彼らの収入は1日におよそ100ペソ(1ペソ≒2円)、運よく銅線などを拾えたとして500ペソ程度だ。副収入を得るために、埋立地の広場では炭焼きも行われている。



水道がないため、手や顔を洗ったり、服を洗濯したりすることもままならず、スラム街の衛生状況は劣悪だ。ほとんどの人たちが、昼も夜もゴミと炭の汚れにまみれながら生活している。炭焼きの煙で喘息にかかる子どもたちも多い。

(2) 陽気な人々

ここでの2週間の生活は、決してやさしいものではなかった。家にはトイレも水道もない。電気が夜の間だけ共同体の発電機から送られてくるのが、せめてもの救いだ。ゴミとドブの悪臭や、おびただしい数の蠅、蚊、ゴキブリ、ドブ鼠との共存には、慣れるまでに時間がかかった。

しかし、そんな生活の中でも、スラム街の雰囲気は決して暗いものではなかった。あらゆる困難を「ノー・プロブレム」と言って乗り越えていく、フィリピン人の陽気な国民性のためかもしれない。特に子どもたちは、ドブの悪臭が漂う湿った路地裏でも、炭焼きの煙が舞う広場でも、大きな笑い声をあげながら走り回っていた。

(3) イエスの存在

彼らと共に暮らす中で、わたしはたびたびイエスの存在を身近に感じた。

大人たちの陽気な仕草や子どもたちのはじけるような笑顔の中には、明らかに神の愛の輝きがあった。それだけではない。痩せ細ったお母さんの力ない背中にも、途方に暮れたような顔でゴミの山を見つめるお父さんの横顔にもイエスがいた。イエスは、彼らの中で、彼らと共にこの貧困の苦しみを担っているのだ。



わたしたちは、このゴミ捨て場で暮らす人々を、人々と共に生きるイエスを放っておいていいのだろうか。人々とイエスの苦しみを少しでも減らすため、苦しみの十字架を共に担うために何かできることはないのだろうか。祈りの中で、答えを探し求めていきたい。



みんなの広場

「霊操」

ヨハネ三好

「霊操」という題を掲げたが、本物の「霊操」についてはありません。大部分の信徒には書物を読んで自力で霊操をするなどということは不可能と言ってもよいでしょう。指導を得ても僕には不可能というほかない、取り上げるのは「霊操」と題する文庫本のことです。前にも一度教会報への投稿で取り上げたことがあったような幻のような記憶があります。

岩波文庫には僕の感覚には何でこれが岩波文庫にと思うものがあります。ロヨラの聖イグナチオ「霊操」もその一つ。ヨーロッパ文学史では無視できない著作だから当然かも知れませんが。

イエズス会門脇佳吉師の訳、注釈付です。門脇師は中学生の頃から禅に親しみ、グレゴリアン大学でPh・Dを取得し欧亜の思想に通じた貴重なイエズス会士です。既に古物商の商品になった僕には、他の「霊操」の訳書よりもこの訳と注釈は親しみやすいので、時々覗いています。

ところで、こんなことを言うと聖イグナチオにどやされそうですが、この「霊操」を読んでいるとともすれば信者である自分と現にこの世に生きている自分という、二元論的な日常にそのまま適用できる場所が多々ありました。つまり信者としてこの世に生きている者の処世術の書と言ってもよいかも知れません。座右に置いて拾い読みするにもちょうどよい、但し文庫本は字が小さいのが難点ですが。

門脇師には他に、「道の形而上学」「身の形而上学」の二著があります。門脇師の禅は要するに「霊操」ではないかと思っています。又、嘗てヴァリニャーノやリッチが当面した問題が、今もそのまま残っているのではないかとも思われます。

最近何かと言えば信徒の働きが云々されますが、その信徒は信仰について無知と言わざるをえないのではないか。知識＝信仰ではないが、神は人間を霊と肉を併せ持つものとして創造されたことも事実です。信じて生きるためには信仰の理論武装も必要ではありませんか。

9月29日は三大天使の祝日。「霊操」には度々天使と悪霊が現れます。見えず触れ得なくても在るものが在ることを忘れないでいたい。

<p>教会報 10月号の発行は、10月2日(日)です。 編集会議 9月25日(日)です。 記事原稿は、9月18日(日)正午までに信徒会館 受付へご提出願います。 (広報部) http://www.rokko-catholic.jp</p>	<p>カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会 〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21 電 話 078-851-2846 F A X 078-851-9023 発行責任者 松村信也 神父 編 集 広 報 部</p>
--	---